

エッセイ

みづら・

ブルフ・ぶら

雨宮 美千代

横浜で生まれ育った。

「よもや横浜から離れることなどない」と思っていたのだが、横須賀に住むことになった。幾度か訪れてはいるが、思いつくままに言葉を挙げてみる。

ペリー・浦賀ドッグ・海防の砲台跡・軍港・おりようさん・海軍カレー・スカジャン・猿島・ドブ板通り・走水神社・観音崎・剣崎灯台・横須賀美術館・田浦梅林・夏島遺跡。

とりあえずパッと浮かんだのがこんなところである。

生活するなら知らなくては、とまずは近所から散策。

家から走水方面に歩き出す。16号線に沿って一本裏の道。まっすぐ続いている。歩いて5分ほどで「砂坂地蔵」。二体の地蔵尊が祀られ、砂坂地蔵はイボトリ地蔵ともいわれ、もう一体のしらすがわ地蔵は、近くの白須川の河原で発掘されたといわれている。お参りを済ませて歩き出す。

少し歩いて右折すると京急大津駅がある。踏切を渡ってすぐに変った郵便ポストが目につく。「竜馬とおりようの恋文ポスト」である。素晴らしい出来とは言えないが面白い。ナイスアイディアである。なんにでも遊び

心は必要で、地域の宣伝にもなるなら大賛成だ。



竜馬とおりようの恋文ポスト

ポストに隣接した大津行政センターの駐車場上の尾根には古墳がある。「大津古墳群」の説明板には、6世紀後半〜7世紀初めに作られた古墳で
一号墳—帆立貝型前方後円墳
(全長23メートル)、

二号墳—円墳

(直径約15メートル)、

三号墳—円墳

(直径約20メートル)

三浦半島の東京湾岸北部で確認された唯一の古墳群とある。一号墳は未盗掘で埴輪等の遺物から埼玉や群馬地域とのかかわりが深かったらしい。

近くにおりようさんのお墓がある信楽寺(しんぎょうじ)に寄り道する。坂本龍馬の妻龍子は龍馬の死後再婚して西村ツルとなり、人生の後半を大津や米ヶ浜など横須賀の地で過ごした。大きな墓碑を確認して、もと来たまっすぐな道に戻る。

【浦賀道と大津湊】の立て札がある。浦賀道とは江戸湾防備のため伊豆下田から浦賀に奉行所が移され、江戸と浦賀間の往来

が盛んになったために作られた東西二本の道である。東の浦賀道は、東海道「保土ヶ谷宿」から六浦を過ぎて相模国に入り、浦郷、十三峠を越えて、逸見、汐入、公郷、大津等を通って、矢の津坂から浦賀に入った。江戸からは17里半(約69キロメートル)である。

こちらが「うらがみち」である。金沢から横須賀に至る道は難所の連続であり、この山越えを避けるため、品川から江戸湾沿いの港、神奈川、金沢、榎戸、大津などに寄港し、浦賀に至る海路も利用された。

西の浦賀道は、東海道の「戸塚宿」から鎌倉道に入り、鎌倉を経て葉山、木古庭、平作、衣笠、大津に至り東の浦賀道と合流するものである。そういえば、この木古庭には私の好きな狛犬が鎮座している。道から外れた人目につかない社殿階上の両端にちよこんといふ。石造の小像で簡単に持つていかれそうなのが、心配になったものだ。さて、こちらは江戸から浦賀まで二十里(約79キロメートル)である。この道は古代の東海道と推定される。浦

賀奉行が江戸への往復に利用するなど公道の位置付けで、東海道のように「うらがどう」と呼ばれていたとの事である。この立て札には金沢の野島浦から大津湊には海路を使うことが多く、沿道の商売が成り立たないので、横須賀村の名主から「大津村よりの旅人乗船禁止願」が出された。旅人往来の記録には金沢から横須賀への海路の利用は陸路の3.5倍、横須賀から金沢へは3.3倍で船便の利用が非常に多かったことがわかると書かれている。

うらがみちをさらに馬堀まで進むと「高尾」という立て札がある。古墳時代終わりから奈良時代初めにかけての高尾横穴墳墓八基が発見されている。三基は防空壕に改変され、埋没していた五基は保存状態が良好で人骨とともに土器や鉄製品などの副葬品が発掘されている。矢ノ津坂遺跡(弥生から古墳時代)が隣接している。また、江戸吉原の廓「三浦屋」の花魁として名を馳せた「八代目高尾太夫」はここ馬堀高尾の出身といわれているそうだ。横須賀の田舎の

漁村から身売りして、大出世を果たしたのであろう。

馬堀をさらに進むと「旧水道トンネル(走水隧道)」の立て札が木々の中に隠れている。横須賀造船所のフランス人技師ヴェルニーが計画した軍用水道として、市内で初めて水道管を施設したトンネルである。走水の豊富な湧水を7キロ先の造船所まで、傾斜を利用した自然流下方式であった。明治29年(1896)東京湾要塞地帯として重要な走水・観音崎地区への乗馬の交通路として現在の規模に拡張され二本のトンネルとなった。現在、路線バスは通るがほとんどの車は海側の並行した道16号線を利用しており、車数は少ない。トンネルを抜けると・・・そこには海が広がっていた。海沿いの道(16号)との合流地点である。山側は崖になっており、そこに小さな祠がある。古ぼけた木札には「平成十六年五月伊勢町町内会有志一同」とあり、この社【玉姫稲荷】の由来が書かれているが薄くなっていて読みづらい。それによると「昔、清水(屋号)の娘のお玉さんが

野狐にとりつかれて、やせ衰えたため、小さな祠を建てて甘酒や油揚げを供えてお祈りしたところ回復した」というようなことが書かれている。木札の冒頭にはこの祠がさる四月十日何者かに放火にあい焼失したとある。確かにずっと前に見たときは、何本もの鳥居が並んでいたように記憶している。残念なことではあるが、こうして有志の方々が見守っていられるのはうれしい限りである。帰宅してから写真を確認すると、祠のへん額には「昭和拾六年式月吉日」とある為、一部は焼失を免れたものと思われる。

16号線に沿って歩いてみると、道の反対側に煉瓦塀が見える。【登録有形文化財 走水水源地】と標識が立っている。先に進むと水源地の説明版があった。走水はその名が示すように昔から地下水の豊富などころとして知られ、明治初年頃、水桶で飲み水を市民に売り歩く商売があったが、その水はこの走水地内仲町の湧水を船で運んだものという。現在も一日二千立方メートルの良質な地下水を供給してい

る市内唯一の水源であり、災害時には応急給水の拠点となる。この水源地の駐車場敷地内に水栓があり、走水水源地の水を浄水して「ヴェルニーの水」として一般に開放している。大きなポリタンクをいくつも抱えて水を汲んでいる人々がいた。

ここから国道を離れ海岸方面に向かつて小道を入ると、走水の海苔やワカメを加工直売している店が何店舗か並んでいる。そこで生めかぶや海苔を買い、本日は帰路に就く。

書物から探してみよう！

日本書紀の中には次の一文がある。「相模の国司、赤鳥の雛ふたつたてまつれり。まうさく御浦郡(みうらのこおり)にえたりとまうす。」

「相模の国司、布勢朝臣色布知(ふせあそみしこふち)等・

御浦郡少領(みうらのこりのすけのみやつこ)と赤鳥えたるもの、鹿嶋の巨櫂樟(かしまのおみくす)とに位および祿(もの)たまう。御浦郡(みうらのこおり)の二年の調役(えつき)ゆるす。」

当時おめでたいしるしとされていた赤鳥の雛を二羽、三浦郡(逗子・葉山・横須賀・三浦の地方)から奉ったことに租税を二年間免除した記録がある。さらにさかのぼると、ヤマトタケルが東征の途中に、古東海道の浦賀海峡を渡って房総半島に行く様子が書かれている。走水の弟橘媛(おとちばなひめ)の伝説である。これは古事記にも記されていて、入水した媛の櫛は走水の神社に、あるいは長浦の吾妻社にまつられたともいわれている。

このように日本書紀や古事記に記されている三浦半島は、かなり古くから中央とのつながりが想像される。

時代を追ってピックアップしてみよう！

平坂人骨の発見―昭和23年に明治大学を中心とした専門家によって、京急横須賀中央駅近くで平坂貝塚の発掘が開始された。貝塚は縄文時代の早期といわれ、発掘された土器は、とり底の深鉢型で縄文式の中の夏島式土器、無文様の平坂式土器がおもだった。この貝塚の最下層から夏島式土器が発見された

ことは、貝塚の古さを物語る。だが、それ以上に、日本最古の縄文時代のほぼ完全な人骨が発見されたことで全国的な話題となった。放射性炭素による年代測定で(7290年〜6443年くらい前)という結果が出た。人骨は全身を伸ばした「伸展葬」という形で埋葬されていた。三浦半島には夏島貝塚や吉井貝塚などから多くの漁労道具や魚骨や厚い貝層が見つかっており、海から多くの恵みをもたらしていたと考えられたのだが、人骨に残された十一本の飢餓線や変形関節症の痕などから、不安定な厳しい生活であったことが窺える。

猿島―東京湾唯一の無人島で、

明治26年に砲台が築造されてから終戦までは要塞地帯で一般人は上陸できなかった。猿島は三笠公園から1.7キロ沖にある周囲1.3キロの小島で島の裏側に海蝕洞窟がある。会場より5メートルほど隆起したところにある深さ16メートル、幅は広いところで6メートル、天井は高いところで3メートルほどである。終戦後、海上公園として一般に開放され、発掘が始まった。

昭和23年の発掘で弥生式後期とみられる土器のほか、石包丁や鉄製品が見つかり弥生時代の人々の生活していた場所であることが分かった。他にも三浦市の毘沙門洞窟や向ヶ崎洞窟などがある。三方を海に囲まれた半島では仏像が海から見つかったという話が数多く語られている。『新編相模風土記稿』に「江戸より十九里。毘沙門郷となう。村内に毘沙門堂あり。ゆえに地名となる。」とあり、海から上がった毘沙門をまつる毘沙門堂が海岸近くに建っていて、近くに住む漁民の信仰が厚く、正月三日の酉の刻、お告げがあるのでおこもりをする風習がある。海からは鶏の音が聞こえて波の間から火がともるといいうので大勢で海上を拝む風習が古くから伝えられている。

大塚古墳群(北久里浜)―大塚古墳群は故赤星直忠博士により、大正十三年に発見され、昭和二十七年には古墳群の中で最大規模の大塚古墳(一号墳)が発掘された。(木棺直葬で人骨・棺は無し)、棺床部からは直刀、刀子、鉄のやじり、耳環、ガラ

ス小玉、須恵器などが出土した。平成四年から翌年にかけて再び発掘調査が行われ、大塚古墳が全長31.3メートル、後円部径18.8メートルで、古墳時代後期としては三浦半島最大級の前方後円墳であることが確認された。大塚古墳の周囲からは前方後円墳二基と円墳三基(2号、6号墳)も発掘され、大塚

古墳群が三浦半島では最大規模の古墳群であることも判明した。また縄文時代早期の集落跡や、太平洋戦争中の高射砲陣地跡なども見つかった。

ここまで縄文・弥生・古墳と時代を追ってきた。地名となっている三浦氏登場までは、まだまだ時間がかかりそうだ。一つ付け加えておきたい。昨年

の歴史散歩で訪れた「浦賀奉行所跡」が伊豆下田から横須賀に移転して今年で300周年を迎える。昨年11月に発掘調査をしていて、地下約1メートル20から建物の礎石と貝殻交じりの砂利が出た。時代劇でおなじみの白洲(しらす)である。古文書と同じ位置に白洲や炊き出し所のかまど跡、西側堀跡が見つ

かった。ちょうど我々が行った時期と重なるのでこれもタイムミングか。

参考 三浦半島の歴史・三浦半島の民話と伝説・観光パンフレット・読売新聞・インターネット